

半所有者

河野多惠子



新潮社

はんしよゆうしゃ
半所有者

二〇〇一年一月三〇日 発行

著者 河野多恵子 (こうのたえこ)

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二・八七一

電話 編集部 〇三・三二六六・五四二

読者係 〇三・三二六六・五一二

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社



乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN 4-10-307807-3 C0093 価格はカバーに表示してあります。

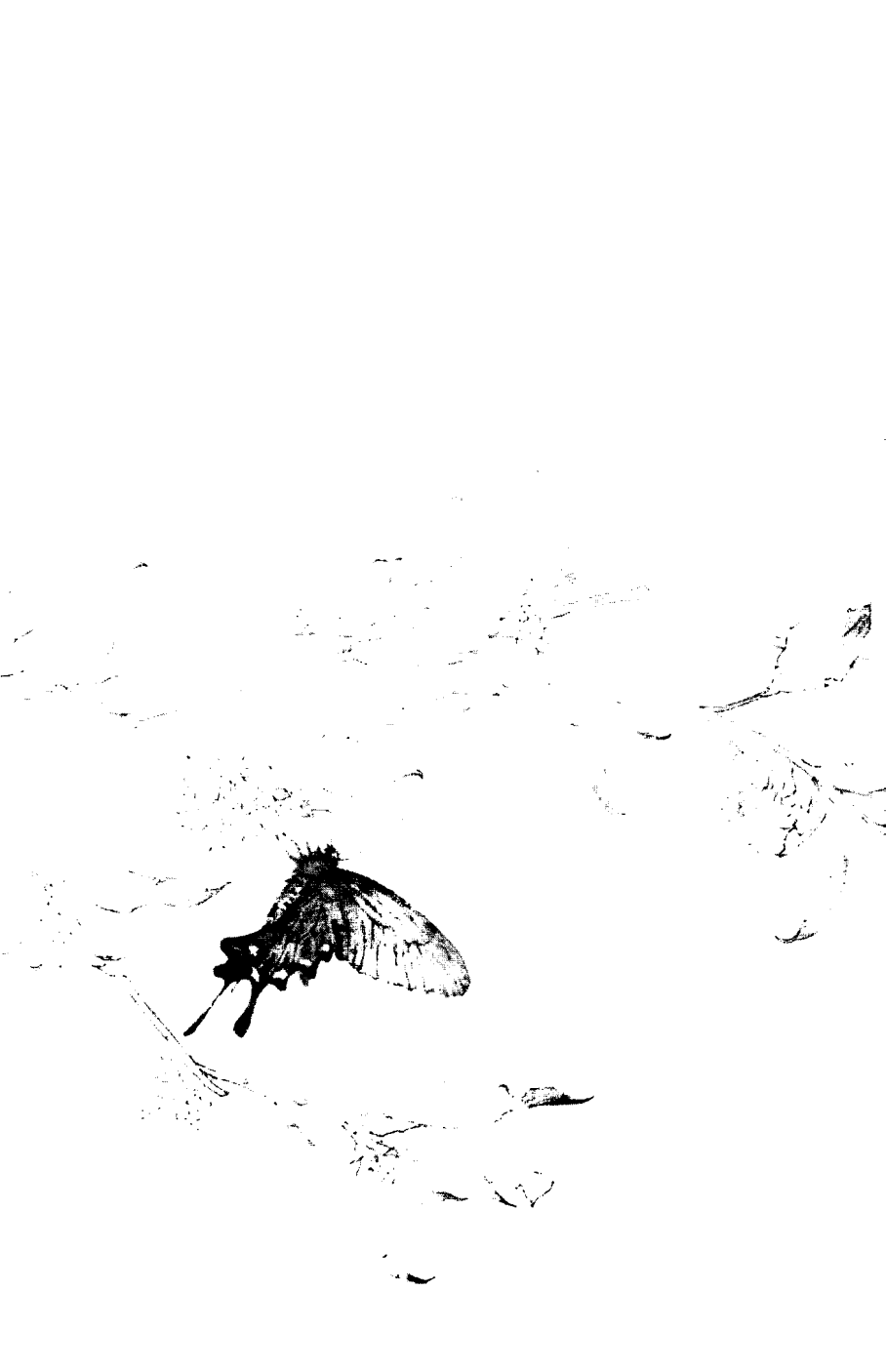
© Taeko Kōno 2001, Printed in Japan

半所有者

河野多惠子



新潮社



「さ、君たちもそろそろ……」

棚の時計へ眼を挙げると、久保氏は息子夫婦を促した。最後に三人だけになったあと知らぬうちに時が経って、その日はすでに終りかけていた。

「そうするかな」

と息子が言った。「——で、早く交替したほうがいいですね。そうだな、三時頃には来ます」

庭先を狭めて^{せば}いる平屋が、ひとり息子夫婦の住居である。

「なあに、そんなに早く来ることはないよ。四時で充分」

久保氏は言った。

「ま、その辺のところはお任せください」

と息子が言った。

「じゃあ、ちよつと……」

嫁が呟くと、座卓の上の物のなかから、自分たちの使った湯呑みなどを少々盆に載せて持ち去る。その背へ向けて、

「さっさとしてくれよな」

息子が言い、座蒲団の上で身動きした。と、胡座から起ちかけた両膝と両手を使って、不意にするすると短く匍匐した。近々と座って、左右の指先で四角い白布を摘まみ起こした。黙した母親の顔をじつと見た。「また、あとでね」と囁いておいて、白布を伏せた。

「おやすみなさい」

玄関先で、嫁が言った。「――あら！　それは変ですわね。失礼しました」

息子夫婦も立ち去った。二人の出たあとの戸締りをして、傍のスイッチで明りを消すと、久保氏はいそいそせぬばかりの足つきで、座敷へ戻る。妻は入院先で、午後も大分過ぎてから息を引き取った。その数分後から、慌しい時間が始まったのであった。久保氏はまだ、彼女の死顔に思いのままには接していなかった。漸く一人になり得て、彼女の傍に座り込んだ。見たいように、見たいだけ、見ることができのだった。白布を掻い遣った。

「おかえり」

と彼は声に出した。

一月半ぶりの帰宅であった。元氣になつての帰宅ならば、
どんなによかつただろう、と彼は思った。半月ほどまえで
も、彼女の帰宅は元氣になつた彼女の帰宅であるものとばかり、
思っていたのであつた。彼女が帰宅したら、あれもして
やろう、こうも言つてやろう、と心待ちにしていたのに
……。あまりに可哀そうで、彼はその氣持をとでも自分から
は口にはできなかつた。ただ「おかえり」としか言えなかつ
た。そうして、声なき声が氣恥ずかしそうにへごめんね」と
言い次第、「いいよ、いいよ。よく歸つてきた」とすぐさま
応じてやろうとしていた。

しかし、声なき声は生じなかった。彼はそれを促すように、

「おかえり」

とまた言ったが、声なき声は聞かれなかった。それでも、彼は死顔に見入ったまま耳をもばだ敲たたてていた。

電話のベルが響きわたった。彼は舌打ちした。しきりに掛ってきていた電話が、夜が更ける頃から途絶えてしまったので気がつかなかったが、彼はその家屋をまだ完全には独占できてはいなかったのだ。彼はベルをそのまま鳴らさせておいた。止んだと判ったところで起って行った。「おやすみ」の

印の下のボタンを押した。オレンジ色の小さなランプが点く。

彼は座敷へ戻って、彼女の傍に座を占めた。

「おかえり」

今度は怒鳴り気味に言った。待つてはみたが、やはり何も聞える気配はない。彼は一層彼女と語りたくなった。別のことを思いついて、話しかけた。

「君、自分が今、幾つか知っているか。——四十九だと思っているな。——そうじゃあないよ。五十一なんだ。今日、ふたつ齡ふえたから」

享年は通常の満年齢ではなくて、数え年を称するという。両親のそれぞれの見送りも経験しているのに、久保氏自身、一向にそのしきたりの覚えはなく、その日の妻の死で初めて知ったのであった。

黒い寐台ワゴンが後部の扉を左右に大きく明けて待っていた。全身白い布で包まれて担送車に載ってきた遺体がそこへ移し入れられると、久保氏は見送りに出てくれた医者と三人の看護婦の前へ戻って、深く頭を下げた。そうして、ワゴンへ入って、遺体の傍の簡易椅子に腰かけた。息子の運転する久保氏の乗用車と、嫁の運転する息子の乗用車とが前後を挟

んで、ワゴンは家へ向った。日の短くなってゆく季節で、暮れ時だった。たださえ窓は小さく、内部は暗かった。狭い車内に横たわっているものがあるのが、何とか判るだけだった。家に帰りつくまでの一時間ほどの間、久保氏は半盲のようになつた視線でそれをただ感じ続けていた。彼がもしも試していたならば、まだ恐らく温ぬかつたのではあるまいか。

門の前で、黒服姿の男が到着を待ち受けていた。玄関の上り口で挨拶がすむと、男とワゴンの運転手が白い布にくるまれた遺体を久保氏の指示した座敷へ運び込んだ。運転手の仕事はそこまでのようだった。

男が両膝をつき、「あちらでございます」と手で指して方位のことを言った。白い遺体からして、その方角が枕上になっていた。「失礼して、ちよつと車の物を……」と男は去つたが、じきに戻ってきた。久保氏と息子夫婦で用意している床が調うのを待って、男は上掛けを片寄らせて縦に三つ畳みにした。「お手伝い致しますか？」と男が言った。久保氏は頷いた。男が白いままの遺体の上体を背から抱え上げ、息子が下のほうを持ちあげた。床に横たえてしまうと、男は明けるように白い布を静かに上から下へ引き退ける。そのあとへ、上掛けを伸べた。「お顔の物は、持って参つたのもござ

いますか……？」と男が言う。「じゃあ、それを」と久保氏は言った。男は次の間の隅で接着テープを剥すような音をさせたりしてから、台紙いっぱいに展げたままの白布を両手に載せてきて、「どうぞ」と膝をついて差しだした。久保氏はそれを垂らして、妻の死顔にかけてやった。

男は次の間と二、三度往來ゆききした。こちらの部屋には、白木の台が据えられ、幾つかの仏具が載せられた。少し長さを違えて二本だけ少々やや引き出してある蠟燭函、細い渦巻式のを一枚載せた線香函、マッチの小箱も置かれた。

男が「お打ち合わせを……」と言った。久保氏は嫁に訃報

の連絡の残りをすませるように言い置き、息子も連れて、リビングルームへ行った。男がファイルとノートを展げて、「お寺さんのことは、こちら様でお頼みになるというお話でしたね？」と先ず訊いた。「ああ。すませてあります。今夜の枕経には八時半にみえます。お通夜と当日の時間は、あなたと相談してから」と久保氏は言った。両日とも男の勤める葬儀会社の式場を使うことになっていた。

打ち合わせることは沢山あった。しかし、実際にしなければならぬことは、大抵は男が引き受けてくれるのだった。「ご戒名もそのお寺さんなのでしょうね？」と男が訊いた。

そうなのだった。それを頂戴すれば、仮位牌の誂えもお引き受けできる、と男が言う。任せることにした。男は久保氏が渡しておいた病院の死亡診断書を引き出した。それを見ながら、片仮名まで振って既にノートに書いてある妻の名前のわきに生年月日を書き写した。ファイルの見出しを押えて展げた頁の細かい数字の一部に見入ってから、享年五十一歳と書き添えた。「ちがうよ。四十九だよ」と久保氏は言った。

「満、ではですね。享年のほうは……」と男が説明した。それで、久保氏は享年のしきたりを知ったのである。――

久保氏が今日ふたつ齡のふえたことをしっかり言ってやっ